

山形昭の体育科（第2学年）研究計画

1 本研究の位置付け

運動する子どもとそうでない子どもの運動時間や運動意欲の二極化，体力の低下傾向が依然深刻になっている。将来の体力向上につなげていくために，すべての運動領域への素地となる体づくり運動の「多様な動きをつくる運動遊び」は，非常に重要な領域である。そのため，教師は運動遊びをとおして体の基本的な動きを総合的に身に付けることをねらいとして指導してきた。しかし，実際は，動きを身に付けられない子どもも見られた。

その原因は，限られた体育授業時数の中で効率よく動きを身に付けさせるために，教師が示範したり子どものよい動きを観察させたりして，「動きの秘訣（動きを身に付けるために適した体の部位の動かし方）」を押さえさせてきたからである。夢中で運動遊びをしている子どもは，自分がどのように動いているのかというイメージをもっていない。そんな子どもに，教師が動きの秘訣を与えても，自分の課題と動きの秘訣とをつなげて考え，自分の動きに生かすことはできない。さらに，動きを身に付けられない子どもの要因は多様にあるにもかかわらず，教師や子どもから特定の動きの秘訣を示しても，それが必ずしも動きを身に付けられない子どもの要因を解決するとは限らない。このことは，示範は教師個人の考えを押し付けるという懸念が報告されていることから伺える。動きを身に付けさせるためには，自分の動きをイメージさせようとして，子どもに複数の動きの秘訣を示し，自分の課題に合った動きの秘訣に気付かせることこそが大切である。

そこで，私は，「動きの自覚化の仕方」と「動きの課題と秘訣の比較」に焦点を当てる。動きを身に付けられない子どもが，自分の課題と友達の見つけた動きの秘訣とをつなげ，**自分の課題を解決するための動きの秘訣が分かり，動きを身に付けることができる子ども**を目指す。

具体的には，まず，自分の動きを自覚化させるために「動きのカルテ」を付けさせる。動きのカルテとは，動かす体の部位や動きのタイミング，動かし方などを見直すための学習カードのことである。その後，動きを身に付けた子どもとそうでない子どもの動きのカルテを比較させることで，自分の課題や動きの秘訣を見付けさせる。そして，動きを身に付けた子どもが見つけた動きの秘訣を複数提示し，その中から自分の課題に合った動きの秘訣を選択させ，試させる。すると子どもは，自分の課題と友達の見つけた動きの秘訣とを関係付け，自分の課題を解決するための見通しをもつ。これが学びをつなぐ場面である。

自分の課題を解決するための動きの秘訣を見出して動きを身に付けた子どもは，今後の運動課題においても，自分の課題とその運動における動きの秘訣とを関係付けて考えることができるようになる。それが，生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を養うことにつながるのである。

2 主張する働き掛け

子どもが興味を引くようなストーリーを設定し，「動きを確認しながら運動する時間」として子どもに教師が身に付けさせたい動きを行わせる。すると，動きができる子どもと，そうでない子どもが現れる。そこで，できた子どもの学習意欲を持続させるために，別の視点を与える。動きができた子どもは「もっと難しい動きができるようになりたい」と考える。また，動きができない子どもは，「動きができるようになりたい」と考える。このように，意欲を高めている状態を問いをもった姿とする。

動きを高めたいと思った子どもに，次のように働き掛ける。

働き掛け1

自分がどのように動いているかを問い，動きのカルテを付けさせる。

「もっとうまくなりたい」と考えている子どもに，「どうしてうまくできないのかな。自分はどのように動いているのでしょうか」と問い，「動きのカルテ」を付けさせる。動きのカルテを付けるのは，動きができなかった子どもには，自分の課題を把握させ，できた子どもには動きの秘訣を考えさせるための資料にさせるためである。また，動きのカルテは2年生という実態を考慮し，丸を付けるような簡単に取り組めるものを基本とする。カルテを付ける際に自分で判断しにくいところは友達同士で見合っ付けて付けるようにさせる。

この働き掛けによって，自分で判断したり友達に見てもらったりして動きのカルテに丸を付けたら記述したりした子どもを，動きを自覚したと見なす。ただし，2年生という発達段階を考慮し，自分の動きについて見直してみた，意識してみたという姿を自覚したととらえる。そのような子どもに，次のように働き掛ける。

働き掛け2

動きがうまくできた子どもとそうでない子どもとでグループを組み、両者の動きのカルテを比較させ、うまくできない原因を問う。

「自分の動きは〇〇のようになっている。これでいいのかな」と考えている子どもに、自分の動きと友達の違いを比較させる働き掛けを行う。まずは、動きがうまくできた子どもとそうでない子どもとでグループを組ませる。そして、そのグループの中で自分が付けた動きのカルテを見せ合いながら、共通点や相違点を分類させる。すると子どもは、動きがうまくできた子どもとそうでない子どもの動きのカルテの丸の位置が違うことに気付く。または、丸の位置が同じであっても、記述された動きのタイミングや動き方などのところに違いがあることに気付く。相違点に気付いた子どもに、動きがうまくできない原因を問う。すると子どもは、相違点にできない原因があるのではないかと、自分の課題や動きの秘訣に気付き始める。

ここで、動きがうまくできない子どもには、赤い付箋に自分の課題と思うものを記述させ、動きがうまくできた子どもには、できるための動きの秘訣を青い付箋に記述させる。そして、その青い付箋を動きのカルテで示したカテゴリーごとに分けて模造紙に貼らせ、その模造紙を体育館に掲示する。

働き掛け3

動きができた友達の動きの秘訣を教わったり選んだりしながら運動を行わせ、課題を解決した理由を問う。

相違点にできない原因や動きの秘訣があるのではないかと考え始めた子どもに、その原因を解決させるため、グループで動きの秘訣を教える活動を設定し、その中で運動させる。この時点でできる子どももいれば、できない子どもがいることが予想される。できない場合には、できる子どもとできない子どもで相談させる。相談の視点として、体育館に掲示してある動きの秘訣を読んで、自分の課題を解決するための秘訣を選ばせる。選んだら試しの運動をさせるといように、繰り返し運動させていく。すると子どもは「動きを身に付けた友達の秘訣を自分の課題に取り入れれば、動きを身に付けた友達のように自分も動きを身に付けることができるのではないか」と動きを身に付けるための見通しをもつ。これが、活用場面における学びをつなぐ場面である。様々な自分の課題に合いそうな秘訣を繰り返し確かめて運動することで、動きを身に付けるための見通しをもち、自分の課題を解決していく。そのような子どもに、課題を解決した理由を問う。すると子どもは、**自分の課題と友達から教わった動きの秘訣**とをつないで、課題を解決することができたことにより、動きを身に付けた喜びを実感する。見通しをもつだけでなく、実際に課題を解決できた経験があるからこそ、喜びを子どもは実感し、次への運動課題にも生かしていくのである。

その後、上記のように見通しをもつことができた子どもは、組織化の場面において様々な場で運動を行うことにより、動きを身に付けることへと発展し、目指す姿となる。

3 検証

(1) 検証すること

- ① 活用の場面で、構想した働き掛けにより、想定した「考えるすべ」を使って、既有的の類似した知識や経験をつなぐことができたか。
- ② 構想した働き掛けにより、学びをつなぐ力を高めた姿になったか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け3において、関係付けるすべを使って、自分の課題を解決するために、友達から教わった動きの秘訣をつなぐことができたかを、ワークシートに書かれた記述により判断する。また、自分の課題を解決することができたかを、実際の子どもの動きとワークシートの記述により判断する。
- ② 組織化の場面において、様々な場で身に付けた動きを行うことにより、動きを身に付けることができたかどうかを、実際の子どもの動きにより判断する。

4 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業(6月) 「用具を操作する運動遊び・体を移動する運動遊び」 (5時間)
- (2) 中間検討会(9月) 「体のバランスをとる運動遊び・体を移動する運動遊び」 (5時間)
- (3) 初等教育研究会(2月) 「力試しの運動遊び・体を移動する運動遊び」 (5時間)